

論文の和文要旨

論文題目 両利きの抵抗——ジョアン・カブラウ・ジ・メロ・ネトの作品における「人間的な」詩の実践とノルデスチの統合

氏 名 宮入 亮

本論文の目的はジョアン・カブラウ・ジ・メロ・ネトの詩とノルデスチ(ブラジル北東部)がどのような問題に関係しているのかを解釈することである。カブラウの最も初期の詩は象徴主義あるいはシュルレアリスムなどの特徴を有し、詩そのものの在り方についての問いを含む構成となっている。しかし、二冊目の詩集からすでに彼の詩にあらわれていた神秘的な雰囲気は見直され、見かけとしては物質的な詩が志向されていくようになる。こうした彼の詩作全般において、彼の詩は、初めからノルデスチを扱っているわけではないが、初期の段階において確立する詩作の方法は後の作品において主要な話題となるノルデスチの問題と関わっている。そのため、本論では、前半の一章と二章においてはカブラウが詩作についての問題をどのように扱ったのかが明らかにされ、後半の三章から五章にかけて詩の問題とノルデスチの問題がどのように関係しているのかが扱われる。

一章では、最も初期の作品にあたる詩集『眠りの石』(*Pedra do sono*)、散文詩「片思いの三人」(*Três mal-amados*)、詩集『技師』(*O engenheiro*)において、どのようにカブラウの詩作の基礎が定まっていったのかが明らかにされる。『眠りの石』は内面や夢の無制限な世界を展開する詩を含む精神的な詩集であったが、「片思いの三人」においては、そうした神秘的な詩作の方法と並んで、身体の知覚に基礎を置く詩作の方法が示されることで、これらの詩作が相対化されている。『眠りの石』の手法とは対照的な身体によって知覚可能な世界を構築するという手法は、「片思いの三人」においてあらわれ始めるが、『技師』で優位に立つ。この身体を規範とした詩作の手法は、続く作品においてさらに追及され、その後のカブラウの作品を特徴づけていくことになる。

二章では、「アンフィオンの寓話」(*Fábula de Anfion*)、「構成の心理学」(*Psicologia da composição*)、「反頌歌」(*Antiode*)という三つの作品から成り、彼の転換点となる『構成の心理学』(*Psicologia da composição*)においてカブラウの詩作の方法がいかに確立されたかが読み解かれる。この作品集はカブラウの詩においてノルデスチが扱われるようになる直

前の段階にあたり、『技師』からより戦略的に詩における問題への批判を展開している。この作品集では、詩において生じる神秘化は受容を阻む問題とされ、各作品が詩作、詩人、詩を、神秘的でなく超越的でもなく、あくまでも人間によって解決され得るという意味において「人間化」していくことになる。こうした神秘化という問題に対して「否定詩学のトリプティック」とも呼ばれる『構成の心理学』は詩の「人間化」を確立していくことになり、後の作品の展開へとつながっていく。

三章では、カブラウの作品とノルデスチが全般的にどのように関わっているのかが明らかにされる。ノルデスチを特徴づけている対照的な地理空間は乾燥したセルタンと湿潤な砂糖黍地帯であり、これらの地理空間はカブラウの詩を特徴づける要素にもなっている。加えて、それぞれの地理空間は貧困という問題を抱えており、カブラウの作品に先行してそうした主題を扱った文学作品が1930年代に書かれていた。後の1945年代にはそうしたブラジルの特定的問題ではなく詩の一般的な問題を追求しようとする詩人たちがあられ、カブラウのその一人に数えられていた。カブラウ自身はそうした詩の問題だけを追求する態度を批判し、詩の問題と貧困に代表される地域の問題を合わせて追及することを選択している。カブラウはブラジルの詩全般が詩それ自体の追求か、社会問題の解決に関与するかという選択に対してどちらか一方を選ぶという形ではなく、両方に関わらせるという方向性を採っている。さらに、ノルデスチの対照的な地理空間は彼の詩を形式と内容の両面で規定しており、乾いたセルタンは抒情性を排した抵抗の詩といった形式面の規定に関わり、一方で湿潤な砂糖黍地帯は社会の分断を招く貧困といった問題とカブラウ自身の幼少期の個人的な経験という問題、つまり内容面の規定に主として関わっている。このように、カブラウは彼なりの形でノルデスチの対照的な地理空間、詩の問題と貧困を詩のなかで統合しようとしていたことがわかる。

四章では、ノルデスチの貧困を扱い、カブラウの最も有名な三作品『羽のない犬』(*O cão sem plumas*)、『川』(*O rio*)、『セヴェリーノの死と生』(*Morte e vida severina*)において、詩の問題と貧困がどのように扱われているのかが明らかにされる。これらの作品は発表年が異なっているものの、彼自身が編んだ作品集に同時に収められていることもあり、批評や研究において三作品を合わせて「カピバリベのトリプティック」とも呼ばれている。『羽のない犬』は象徴的な形で、『川』は具体的な地名などを交えた直接的な形で、『セヴェリーノの死と生』は主人公であるセヴェリーノを中心とする貧者たちを登場人物とした戯曲という形で、ノルデスチの貧困を描き出している。そこで扱われているノルデスチの貧困は同地域の文化との関係においても追求されており、文学あるいは文化が無関心、隠蔽、神秘化によって貧困を助長し得ることが暴露されている。こうした問題の解決のためには詩と貧困の人間化、問題の解決は人間によって可能であるという認識が必要であることを作中に読み取ることができる。加えて、これらの三作品は、ノルデスチにおける文学の受容という問題も考慮に入れ、貧困によって分断される読者に対応するために、『羽のない犬』を「読むための詩」、『川』と『セヴェリーノの死と生』を「聞くための詩」に分類する『二分水』(*Duas*

águas) という 1956 年当時のまでの全集に収められている。これらの三作品とこの分類基準を含んだ全集の関係は、研究者や批評家によって議論されているが、ノルデスチという特定の文脈においてではなく一般的な受容の問題において評価されている。しかし、カブラウ自身の考えも合わせて考えると、こうした分類基準に沿った作品群は分断されたノルデスチに対応し、統合を目指そうとした試みであると解釈することもできる。このように、「カピバリベのトリプティック」を構成している三作品はノルデスチという特定の地域において詩の問題と貧困に代表される社会問題を関係し合っている事柄として解決を目指そうとする試みだったといえる。

五章では、ノルデスチの貧困を扱った「カピバリベのトリプティック」の延長線上にあり、同地域の貧困をより包括的・総合的に批判しようとする試みである「フウイヌム国」(The Country of the Houyhnhnms) と『修道士の戯曲』(*Auto do frade*) をどのように解釈できるかが明らかにされる。これらの作品は貧困によって分断されたノルデスチの人々の関係自体を批判的に捉えるもので、支配する側だけでなく支配される側にも統合を阻む問題があることを示している。「フウイヌム国」は 1966 年の詩集『石の教え』(*Educação pela pedra*) に収められている詩で、『ガリヴァー旅行記』の最後の章を下地としノルデスチにその状況が当てはめられている。オリジナルのテキストと同様に、カブラウの「フウイヌム国」も人間であるヤフーが支配される対象で、馬であるフウイヌムが支配する側に立っている。この両者の不均等な関係はノルデスチにおける貧者と有力者の関係との対応を暗にほのめかしている。ヤフーもフウイヌムも社会の統合を阻んでしまうという問題があるため、カブラウはどちらか一方の批判ではなく、両者の関係を批判している。そうした関係を批判的に語ることはどちらの側にも立たないという難しい立場をとらなければならないということが「フウイヌム国」には示されている。『修道士の戯曲』は 1984 年に書かれた戯曲で、ノルデスチの歴史を題材としている。主人公は 19 世紀前半に帝国として独立して間もないブラジルに対して「赤道連盟」と呼ばれたノルデスチの諸州の連合を率い、支配に抵抗した一人であるレイ・カネカ (Frei Caneca) と呼ばれる人物で、カブラウの作品では捉えられた彼の処刑の日が題材となっている。彼の作品が再現しているカネカの処刑を通じて示されているのは支配する側も支配される側も適切な判断によって行動できているわけではなく、そのために社会の統合は阻まれてしまうという問題である。その問題はさらに文学の適切な受容が実現しないのは作る側だけの問題ではなく、読む側の問題でもあるということも示している。統合の阻害は、ノルデスチにおいても、文学の受容においても、支配と従属の関係の固定化によって引き起こされ、そうした関係自体を、変えることのできないものとして神秘化せずに、人間によって変えることができるのだということをカブラウのこれらの作品は示している。

結論として、各章において扱われている作品を総合的に判断すると、カブラウの創作は詩の問題とノルデスチの問題を互いに関連する問題として扱っていたといえることができる。そのため、詩の問題とノルデスチの問題を同時に批判的に扱う彼の創作は両利きの抵抗と

呼ぶことができ、二つの問題に対しては人間的な詩の実践とそれによるノルデスチの統合が目指されていたと考えられる。そして、こうした両方の問題が関わり合っているように、それに対する二つの問題を解決しようとする試みも関係し合っている。人間的な詩の実践はノルデスチの統合に結びつき得るものであり、ノルデスチの統合は人間的な詩の実践をさらに展開させ得るものなのである。